

## 再発見 Running Handling Game `Rugby`

W杯日本開催は喜ばしいことです。

この機に、日本ラグビーの更なる普及発展とW杯の成功を切に願う気持ちから、ラグビー愛好者の裾野を広げ、競技の原点に立ち返りプレーヤーの底上げを図ることを改めて一緒に考えたいと思います。W杯で勝つために、何よりもトップリーグのレベル向上が大切と話題はそちらにいくようですが、それはどちらかと言えば枝葉の問題です。根幹になるのは、日本のラグビーそのもの、即ち一つ一つのプレーについての考え方の反省と修正が必須問題です。具体的には、原理原則に基づくプレーの見直しで、練習時の指導から始められねばなりません。根幹がしっかりしていなければ枝が伸び葉がしげり立派な花は咲きません。

ラグビーの歴史と土壌から根幹となるものを抽出検証することによって、原点とあるべき方向性の確認が先が必要です。それは指導に当たっての重要課題であり、プレーヤーにとって必須心得事項であり、レフリーにとって留意点でもあるのです。この機を逃すことなく一步を踏み出すことが急務です。

現代ラグビーは、1970年イングランド協会創立100周年を期す改革に始まり、ミレニアム改革を経て、IRBのリードの元に2023年への試みが着実に進められています。ラグビー進化の基調は、より面白く楽しいラグビーのグローバル発展ということです。ラグビーは世界中で老若男女よってプレーされており、求められるスキルと身体的条件に多様性があるため、あらゆる体型、サイズ、そして能力を持つプレーヤーがプレーに参加する機会を、すべてのレベルにおいて得ることを目指しています。目的達成のための方向性はラグビーを simpler に easier に進化することがはかられています。

ラグビーは **Running Handling Game** あるという正確な認識のもとに発展をはかることが大切な出発点となります。身体をぶつけあう格闘技があるために、激突賛美ムードが強いだけでは本質からずれてしまうことを戒めねばなりません。

**Running Handling Game RUGBY** 探求という総括のもとに、具体的且つ究極的には「立ってプレーする」ことの徹底と、絶対にプレー中断せず「継続」することという結論に到達します。そしてラグビーが simple で easy な楽しいスポーツであるという感覚が醸製され明るいムードが広まることが進化に大切なことです。それは、身体が小さく敏捷性に優れている日本人の特性にあった戦法に合致するものです。また、高校生がラグビーを嫌う原因といわれる 3K(きつい、汚い、危険)を解消解決するものでもあります。年少者が楽しんでいるタグラグビーに連係する一線上のものであります。

前節を受けて、目的達成のために、「立ってプレーする」という分かり易い原理を基調に Plan (a)~(h)について考察を深めていきましょう。

### Plan (a) 「立ってプレーする」ことが基本であるという基礎認識を高める

「立ってプレーしている」と断言する人ももう一度考えてください。

試合中「立っていない」のは試合時間の1%位にもならない短い時間の問題ですが、ボールを取り合う重要な瞬間の是非なのです。地上に横たわっているプレーヤーは競技に参加していない人であることはラグビーの基本的な原理の一つです。獲得したボールを保持しつづけるには、ボールを持ったら倒れないように走り、味方に繋がらなくてはなりません。それは味方のサポートがあつて初めて可能になるのです。ボールを持った味方が捕まって倒されたら、その味方の上に重なるようにしてボールを相手に取られないようにすることだけを考えてはいけません。方策の第一に「立ってプレーする」という議論にならないようなことを掲げたのは、プレーについての概念を根底から見直さないかぎり先が見えてこないからです。

### Plan (b) 「意識的に前を見て走る」ことを強調する

立ってプレーする第一歩は「しっかり」前を見て走るということです。

しっかりということは、大きく目を開いて、睨みつけるように見て判断することで、前方の情勢判断のために必要であるとともに、姿勢を正す効用があります。

練習で身につけたことを試合で実行することは大切なことです。一つのパターンの動きを試合で教えられたとおりに行動した方が判断するより適切且つ早い場合が全くないとは言えませんが、ごく限られた場合で、状況判断できないプレーヤーになってしまうという大きな損失まで背負うことは避けねばなりません。

多くのプレーヤーは習慣的に惰性的にプレーしているもので、平素の練習に導かれた習慣も予想外の状況に対応していない場合はいきてきません。ボールを持って走っていて捕まえにきた相手に当たる時も、ボールを取り合っている集団に突っ込む時も突進で肩が腰よりひくくない

状態で顔をあげて目を大きく開いて前をみれば目は腰より大分高くなり、判断力が湧いてきます。勇気をもって突進するといっても、突進の場合頭を下げて、目は下（地面）を向いているのは危険です。下を向いている（時には目を閉じる）のは、判断対応できないし、危険ですが、突破力を高める姿勢としているのは間違いです。

### Plan (c) 「捕まっても倒れない」という意識の高揚する（自分から倒れる傾向根絶）

立ってプレーするには捕まっても倒れないという意味と努力が必要です。相手は捕まえて倒そうとする、そこで発想を転換するために倒れることと表裏の関係にある正しいタックルについて研究しましょう。



正しいタックルは タッチラグビーにスムーズに接続導入されるものです。タックルは相手を倒すことだけを考えて低ければ低いほどよいというものではありません。

低い、掬うようなタックルは相手を一気に倒す点はよいのですが、飛び込む訓練が必要高度の技と相手の走り方によって決まり方が異なるものです。きまり方が痛快だけで評価してはいけません。aggressive tackle は攻撃的というのは、相手を捕まえ、倒し、続く展開に有効に働くタックルであって強烈さの問題ではありません。

本題の捕まっても倒れない工夫も大切です。矛盾するようですが、タックルのされ方の課題をまとめましょう。まずタックラー捕らえられるまでのコースの取り方やステップ、ハンドオフ等々があります。身体も半身にして片手でボールの保持するのも有効です。タックラーを睨み付ける位によく見て決定しなければなりません。

年少者に楽しませているタッチラグビーまたはタグラグビーは、倒れないラグビーであり、初歩的に危険を避けるという点で一線上のものです。

### Plan (d) 再開プレー継続プレーがスムーズ行われることの徹底をはかる。

これは立ってプレーすることの前提になることです。

キックオフとドロップアウトについてはルールを守れば問題なく進行しますが、再開プレーと継続プレーは問題につながる可能性があります。

- ・再開プレー [スクラム] をスムーズに「ボールを持って走る、捕まれ、プレーヤーが集まって組打ち scrummage になります。そして組打ち永く継続するというのが普通の流れです。組打ちが unplayable 即ち展開への道筋がみえなくなると、笛が吹かれて、ゲームは中断し、組打ちを分解して改めて再開です。

The History of the Game を見ますと 1892 年に次のようにあります。

the ball is put down between players who have a closed round on their respective sides  
unplayable 状態になれば一旦中断し、ボールの回りに集まったプレーヤーの間にボールを置き、合図でそれを足で取り合う形で再開しました。

1905 年には : is formed one or more players

一人または数人によって構成されたことが記述されています。

1911 年には : Referee may order the ball to be put into the scrummage

レフリーがボールの投入を命じるようになりました。

ルールがいろいろ工夫されていくわけですが、それらの話し合いや工夫は、equal condition, open play, safety という3つの基礎理念のもとに話しあわれました。実際的にはポイントの(線)上で足でボール取り合うプレーです。今のように押し合うプレーではありません。ボールを取り合う者同志が、立って、手と手で組み合い、又は、肩と肩を触れ合って組み合ううちに、力が入り、少しでも前に押しして有利にしようとしたのですが、ポイント(unplayable になった地点)上でボールを取り合うことが原則条件です。獲得されたボールが展開され、オープンサイドでポイントを通る元の線(想像線)を越えて進んだ方が利益を得たこわいで、ゲインラインとよばれます。

スムーズに行なわれるためには、組むための時間の浪費をしないということも含まれます。ポイントの上でかっちりくんで、押し合いより、ボール取り合いに集中する。

一方がポイントの上でしっかりバインドしてとまっているのに、片方が激しくぶつかり組んでポイントをオーバーするようなことがあれば、レフリーは厳格に笛を吹いた注意しは正されなければペナルティを科すようにすればよいのであって平素の指導とレフリーの努力にかかっているのです。この場合第一列の肩の線が前後する許容範囲は10cmであって、片方が以上前にいけばレフリーは笛を吹いて組直しを命じ、それをくりかえせばペナルティ科すことを徹底的に実施すればよいのです。外国のチームは激しぶつかつてくと強調するのは無用です。代表チームが重点的に対応すればよいのであって不可能な問題ではありません。

・再開プレー [ラインアウト、クイックスロー] をスムーズに

際限なく広い原野では、ボールを持ったプレーヤーがより広い範囲で相手を突破しようとすると競技地域が再現なく広がりが見えなくなります。プレーを集約的にするため縦横の区切りを設け、それより外へでてしまった時点で中断し再開するものです。

1866 年には : throws it out at right angles to the line of touch where the players standing to receive it, or bound it outside the line of touch

並行な2列を形成することになっていません。直角に投げなければいけないのですが、転ばして(一旦地面につく)方法も可でした。

ルールは EQUAL CONDITION OPEN PLAY SAFETY という基礎理念のもとに工夫がなされました。

投げ入れられるボールをキャッチするには背の高い方が有利です。不利を補うのにぶつかり合うようになり、2列に並ぶことや人数の制限が取り入れられました。2列のあいだに十分な間隔をとるようになり、高さを得るためにキャッチャーは他のプレーヤーの支えられることが合法になり、大きな転機を迎えました。キャッチポイントを相手にわからせないいろいろな変化により、最高に高さを競うようになり、無用なぶつかりは全く無用になりました。スムーズであるために投入・キャッチング・展開と時間の浪費をしないことは大切で、クイックスローは合法で有利な方法でチャンスが逃がしてはなりません。

・継続プレーである [ラック] をスムーズに

立ってプレーするためにラックのテクニックが大きな要素になります。ボールを持って走る、捕まる、組打ちになってボールをとりあうというのが自然の成り行きです。この場合に不規則で不定形な組打ちをよりスムーズになるためいろいろと話し合われました。equal condition, open play, safety 基礎理念のもとに工夫されてきました。

ラック導入されるまでは組打ちをルーススクラムと呼ばれました。

1960 年代ラック導入し、「ルーススクラムという言葉を使うな」断言し指導が始まったボールを持って走る、捕まえられる、組み合ってボールとりあう状態が永く続き中断ではなく、継続プレーとしてラックが考え出されたのですが、ボールの回りに横たわっている人と立っている人で構成されますが、重なって倒れる人があって複雑になります、重なってよこたわるのは反則だが自然な流れ(行動)の中で罰するという判断は下しにくい結果、横行しているのが現状です。

ラックをスムーズに行う要件は、ボールを持っていたプレーヤーが、身体からボールを離し、腕を一杯伸ばした地点にボールを放すことです。放すのは自分の身体の手相手側でもよ

いのです。見方がそのボールを拾って前進すれば有利です。ボールを放す時期と方法にいろいろな段階と程度があって工夫次第で結果が大きく違います。そして、ボールをできるだけ早く広いあげてボックスへ展開することが必須要件です。  
ラックは継続プレーで継続することが条件です。獲得したボールを無策にラックにすることは身体が小さく敏捷性に富むという日本人の特性にあったプレーに馴染まないことです。ラックがスロースになる即ち地上に横たわっている人に係わるプレーがスムーズになるということは、ラグビーが simple で easy になるということにつながるのです。

・継続プレー [モール] をスムーズに

モールが成立するには少なくとも3人のプレーヤーが必要で、3人とも立っていなければならない。

「立ってプレーする」という課題に対するモールは重要な要素です。

同じ組打ちですが、不規則不定形で全員立っているという点でラックとき異なる。

「モール」という言葉は創世期のラグビーでは基本的で常時みられた状況です。

equal condition open play safety 基礎理念のもとにいろいろと工夫改正がくりかえされました。継続プレーとして常時行われるものです。前進を阻止するために「引き倒す」ことが双方 equal condition の理念から認められるようになりましたが、立ってプレーするという基本理念の元に戻されました。

参加しているすべてのプレーヤーは、モールの中に引き込まれているか、バインドされていることが条件であり、総体として立ったまま、ゴールラインの方向に前進していることも必須条件です。

モールをスムーズに進める要件は、動きを止めないことです。前進を図り、直進ができなければ斜めに進むと軽く進む場合があります。右または左の回転力をかけてみると反動がついて大き回転する動きが生まれるものです。そしてタイミングをはかってボックスへ展開します。

## Plan (e) ゲームを断ち切る [タッチキック] を少なくしてゲームを継続する

タッチになると中断され戦えないという残念な結末になることをできるだけ避けねばなりません。

合法的に意図的ゲームを切るタッチがあることは否定できません。しかし、意図的にタッチへ投げればペナルティが科せられるということは忘れてはなりません。ロングキックの場合はタッチになることがあり、勝利を争う場合常識的 reasonable に考えた結果でしょう。

タッチになると戦いが停止するわけで、投入までの時間の浪費は許されません。

22m ライン内からのキックの特例は正確なキックを求めるものであり、根本的にはタッチが少なくなることを糸するものです。

go forward, support, continuity という原理を心奉して勤めることが一番強く一番面白いということ忘れてはなりません。ゲームが切断されることによって。走らないだけでなく、走れないプレーヤーを作ってしまうマイナスは間接的とはいえ非常に大きいマイナスです。ゲームを作戦的に切ることを覚えると、運動量の少ない小さなゲームが身につけてしまうのです。

## Plan (f) immediately という言葉の意図を理解しプレーの継続に努める

立ってプレーしプレーを継続することに係わる重要な言葉が2つの言葉が同じ意味に「直ちに」と表現されています。

直ちにの時間限度は一口で1~2秒と簡単に言えない柔軟且つ感覚的な問題があり、双方時間差があります。

once 一度、同時 for one time, or on one occasion only

at once 直ちにという意味で使い慣れている

without delay, at the same time

immediately の意味として直ちに、直接にと書かれていますが、

immediate: without intervening medium, direct, not separated by others

タックルが成立した時何とかがしてプレーをけいぞくすることを優先第一にかんがえなくてはなりません。直ちにという時間制限の問題でなく、継続の意思が求められている直ちにの時間の判定は、art の領域でレフリーの知識と感覚のレベルがとわれるものです。The Art of Refereeing の芸術性についてよい笛の評価観点を言葉にするならば、プレーが継続するならば可、継続しなければ不可ということなのです。

身体の小さい日本人はその敏捷性と起用さを生かして無用のぶつかりをさけ避けるなど日本人にあったプレーを考える場合に、タックルが成立しても immediately にパスをすることが第一です。タックルされた瞬間に味方のサポートがすぐ近くにいなくても待つ意識と習慣と練習が大切です。10m 離れていても全速力で接近すれば 2 秒あれば (秒速 5m) パスをキャッチできプレーがスムーズに続きます。タックルされた人はボールを放し置くことだけを考え、味方もラックになることだけを想定しているから良いプレーが身につかないのです。その結果無用の体力消耗とプレーの中断という実にならない流れになってしまっています。

### **Plan (g) プレー継続のために「反則しない」ことを決意し努力する**

反則は、心がけと習慣形成の問題で、そのための指導が大切で、指導者の意識改革が最も大切です。当り前の事ですが、ミスと違って反則は無い方がよいのです。

**Running Handling Game** はプレーが続く程面白いのです。ペナルティキックを科せられる反則がゲームをスポイルしている現状打破しなければなりません。勝つためにルールぎりぎり一杯のことで反則をとられても仕方ないという考えは断じてゆるされません。

ペナルティは罪に対する免罪符ではないのです。

go forward, support, continuity 勝つための原理を忘れてはなりません。`continuity'プレーを継続することが第一です。ゲームが中断されることに慣れて、運動量の少ないゲームが身につく、走らない、走れなプレーヤーをつくることになるマイナスは非常に大きいものです。

### **Plan (h) ELVs2008 の研究しその意図を生かす**

ラグビーの世界では、日々普及発展を目指して、プレーヤーたちの発想を生かすため検証をしています。ミレニアムの改正後 IRB は更なるグローバルな普及発展を目指して議論を重ね、ラグビーをより easier に simpler にする努力をして、2009年にELVsが導入されました。elementary 試験的というのは、研究の成果を問う意味です。

1960~70 年にも loose という言葉を排することを筆頭に改革がなされましたが、目的は十分達せられませんでした。プレーヤーは勝つことだけを考えるのは普通のことです。ラグビーではプレーが先で、問題点が議論され、ルールの 3 原則をもとに研究されて文字にされるものです。その過程は結論的ルール以上に重要なものです。その過程即ち話し合いの内容理解こそが重要なのです。改正の必要性和目標を理解しその意図を生かすことが一番大切なのです。2009 年にラグビーは想定とおり simple にも easy にもなりません。しかし、その方向性は失ってはならないのです。simpler に easier という目標はこの 50 年一貫して不変のものなのです。

この機に、日本も W 杯開催国の誇りをもって、劣等感や後進性を捨て、楽しいラグビー創造をリードする決意をし、一歩踏み出すことは有意義なことだと思います。W 杯まで 10 年しかないのです。

2009. 10. 11

西川 義行